

# 亡霊文学を見つめ直す

(司会・講師) 多摩美術大学専任講師 中嶋英樹  
(講師) 東京藝術大学教授 侘美真理  
(講師) 東洋学園大学准教授 小林広直

## 企画概要

本シンポジウムは、1990年代以降の人文科学に見られた‘the spectral turn’という潮流を参照点としつつ、亡霊文学を読み解く方向性を示すことを目的とした。

この‘the spectral turn’は、90年代以降、文学研究のほか、視覚文化論や美術論、社会学やメディア論などの幅広い領域で、亡霊や幽霊に関連する語彙が、ときに字義通りに、ときに隠喩として幅広く使用されてきた傾向を指す。亡霊というコンセプトは、可視／不可視、存在／不在などの二項対立をかく乱するものとされ、自己同一性や主観性、歴史、セクシュアリティ、ジェンダーなど、とくに周縁的なものを語る概念として多用された(事例として、Vidler; Castle; Rabaté; Buse and Stottなど)。こうした傾向を初めて指摘したのは思想家 Martin Jay で、彼は1995年の論考で、‘the uncanny’という語が‘a master trope’ (20) となっていると述べ、この指摘を受けた Roger Luckhurst が2002年の論考で‘the spectral turn’という用語を使用した。こうした亡霊に関する語彙の存在感は今日でも見られるもので、たとえば、2017年に出版された亡霊文学の参考図書では‘Ghosts in Theory’というセクションが設けられ、動物、フェミニズム、クィア、ポストモダン、ポストコロニアルなどの文脈で亡霊のコンセプトが議論されている(Brewster and Thurstonを参照のこと)。

このように概観される‘the spectral turn’という術語には、一つ、留意すべき重要な点がある。すなわち、この語は、新しい「転回」として素朴に称揚されたのではなく、「いわゆる」という、批判的な視線込みで使用されたということだ(Blanco and Peeren 32)。Luckhurstがそのエッセイのタイトルで、この術語を引用符で囲っているのは、このような両義的ともいえる姿勢の現れといえる。こうした条件付きとでもいう態度には、亡霊というコンセプトがあまりに幅広い対象に適用できるあまり(とくに隠喩として使用される時)、Luckhurstの言葉でいえば、それぞれの亡霊や幽霊に関する時代性などの「個別性が、普遍的な言説のもと、平準化されてしまう」(541)という事情がある(同様の指摘として Bown, Burdett, and Thurschwell 12)。こうした議論ゆえ、Jeffrey Andrew Weinstock は、その論集の序論にて、‘America’s spectral turn’というふうに、地域の個別性を強調したうえで、2000年ごろの合衆国にて、亡霊のコンセプトが、人文科学から映画、ポピュラー文学まで幅広く流行した歴史的・文化的文脈を追跡している。

こうした「転回」にまつわる議論の蓄積を念頭に、このシンポジウムでは「亡霊文学を見つめ直す」という題を採用し、19世紀中頃(侘美)、19世紀末(中嶋)、20世紀前半(小林)と、扱う時代こそ限定的ではあるが、亡霊文学を論じる新しい視座を提案したいと模索した。

## Works Cited

- Blanco, María del Pilar and Esther Peeren. ‘The Spectral Turn: Introduction.’ *The Spectralities Reader*, edited by María del Pilar Blanco and Esther Peeren, Bloomsbury, 2013, pp. 31-36.
- Bown, Nicola, Carolyn Burdett, and Pamela Thurschwell, ‘Introduction.’ *The Victorian Supernatural*, edited by Nicola Bown, Carolyn Burdett, and Pamela Thurschwell, Cambridge UP, 2004, pp. 1-19.
- Brewster, Scott, and Luke Thurston, editors, *The Routledge Handbook to the Ghost Story*, Routledge, 2018.
- Buse, Peter, and Andrew Stott, editors, *Ghosts: Deconstruction, Psychoanalysis, History*, St. Martin’s, 1999.
- Castle, Terry. *The Apparitional Lesbian: Female Homosexuality and Modern Culture*, Columbia UP, 1993.
- Jay, Martin. ‘The Uncanny Nineties.’ *Salmagundi*, no. 108, fall 1995, pp. 20-29.
- Luckhurst, Roger. ‘The Contemporary London Gothic and the Limits of the “Spectral Turn.”’ *Textual Practice*, vol. 16, no. 3, winter 2002, pp. 527-46.
- Rabaté, Jean-Michel. *The Ghosts of Modernity*. U P of Florida, 1996.
- Vidler, Anthony. *The Architectural Uncanny: Essays in the Modern Unhomely*, MIT, 1992.
- Weinstock, Jeffrey Andrew. *Spectral America: Phantoms and the National Imagination*, U of Wisconsin P, 2004.

# 幽霊とセンセーション

## M. E. Braddon のゴーストストーリーを読む

侘美真理

### ‘Female Gothic’ と Victorian ghost stories

本シンポジウムの趣旨に照らし合わせ、まずはヴィクトリア朝女性作家と「ゴーストストーリー」の関係に関する批評を整理する。1850年代から始まる「ゴーストストーリー」の流行、またこのような短篇群の量産体制に女性作家たちが貢献したことはよく知られている。中でも1860・70年代は、Mary Elizabeth Braddon (1835-1915)らセンセーション小説を書いて人気を博した女性作家の幽霊譚が数多く雑誌に掲載された。彼女らの創作した ghost と sensation、spectrality と sensationalism の関係は‘Female Gothic’に由来するゴシック的不安で語られることが多い。1970年代にゴシックというジャンルが女性の多様な関心や不安を詰め込む1つの媒体として論じられて以降、多くのゴシックテクストの深層にある女性の怒りや不安が顕在化した。しかし、ゴシックではなく「ゴーストストーリー」を対象に論じた批評は総じて少ない。1996年に Vanessa Dickerson が初めて、gothic でもなく ghostly なものでもなく、限りなく ghost と言えるものを対象とした作品のみに焦点を当て、中葉以降の女性作家らによる作品群を論じたモノグラフ *Victorian Ghosts in the Noontide* を刊行する。これを機に、Braddon ら 1860・70年代以降の短篇も個別に批評され、当時量産された作品もシリアスに分析され始めた。

しかし、その Dickerson の議論もそれまでの‘Female Gothic’の大きな枠組を踏襲するものであった。「幽霊」(ghost や spirit)という媒体によって表現されたものは、社会が構築する二分法のシステムの狭間(たとえば「天使」と「悪女」、「動物」と「人間」)でどちらにも依拠できない、当時の女性たちの周縁的な状況である。振り返れば Dickerson の議論は、Roger Luckhurst が示した‘spectral turn’の1つの典型例であり、彼が批判した幽霊の隠喩、‘trope’の複製を示している。もっとも、当時の女性たちの経済的手腕や Spiritualism における medium としての活躍など歴史的な脈も明らかにした点で意義があった。‘Female Gothic’を中心とした議論はその後も続き、またデリダの hauntology を意識した spectrality や spectralisation などの概念的枠組を用いた議論も一時期頻出した。再び「ゴーストストーリー」に特化し始めるのはここ10年である。マイナーな作家の作品を個別に論じてきた批評家たちの成果は、例えば最近の *Women’s Writing* における2回の特集で明らかになっている。

### M. E. Braddon の‘The Shadow in the Corner’ (1879) と ‘The Face in the Glass’ (1880)

1860年代に Braddon が世に出したセンセーション小説が批判されたのは body の描き方であった。女性のフィジカルな暴力行為の描写の他、衣服や髪の毛や顔のパーツなど肉体の一部が性的な示唆を含んで描写されることも非難された。しかし、Braddon の幽霊譚において肉体や physicality を強調するケースは少ないと言える。

‘The Shadow in the Corner’では、雑用係として働くメイド Maria の存在が spectral 化されている。主人の邪魔にならずに働くため最初から見えない存在であり、また彼女の将来を暗示するように、遺体を想起させる妙な美しさを持った外見で、その存在は「仮死」状態のようである。また、登場する幽霊も形ある肉体を持たず、影のように感じられるものとしてあり、厳密には視覚を通して目撃されるものではない。もっとも、テクスト内で spectral 化されていた Maria が最終的に本物の幽霊になるという展開、つまりテクスト外で幽霊自身の body が成立するという意味において、ゴーストストーリーとしての仕掛けは明らかにされている。しかしながら、当時の読者が Braddon に期待したであろう physicality の強調はなく、むしろ肉体も感情も奪われた若い女性の spectral 化という暗喩的な装置を通して、下層階級の女性の社会的窮状が示されていると言えるだろう。

1870年代、センセーション小説の流行に陰りが見える。他方で幽霊と結びついたセンセーショナルな大衆文化は Spiritualism であった。特に当時人気があったのは‘full-body materialisation’と呼ばれる幽霊(spirit)の全身物質化現象であり、Katie King に代表される materiality を強調した spirit がセアンスに登場した。Braddon の‘The Face in the Glass’はこのセアンスの幽霊を揶揄している。女性の登場人物 Ruth は死ぬ直前、夫の前に亡霊となって現れるが、身体パーツから徐々に全身化して登場する姿はセアンスの幽霊の登場と似ている。しかし、幽霊と夫の間にはコミュニケーションが成立せず、感情的な交流が欠如している。セアンスの演出に似せて幽霊の肉体は誇示されるものの、むしろ共感が伴わないことが強調され、夫婦関係の問題を露呈させている。

1880年以降のセアンスの流行はより精神的な結びつきを重視するテレパシーなどの現象に切り替わり、また1882年に創立された SPR はテレパシーを研究しながら感情のメカニズムを検証し始める。Braddon は2つの幽霊譚において肉体の誇示やその物質性を敢えて批判し、感情や心理に関心の対象を変えていくのである。

# 「生者の幻」現象と『ダロウェイ夫人』

中嶋英樹

生命の危機に瀕した者の霊が、遠く離れた親族や友人のもとを訪れる。本発表では、このような心霊体験をモチーフにした文学作品を、19世紀後半の短編小説から第1次大戦後の長編小説まで幅広く取り上げ、同現象を科学的に精査した19世紀末の心霊研究という歴史的な脈のなかで検討し、この特定の時期に亡霊表象が担った役割の1つを示そうとした。

## crisis apparition あるいは「生者の幻」現象

典型的な物語進行を見るため、女性作家 Alice Perrin (1867-1934) による ‘The Summoning of Arnold’ (1901) という短編を詳しく見る。インド駐在の収税官は結婚して間もないが、妻が持病の療養のため英国に戻ってしまう。彼は体調を崩し、それを心配した友人がある夜彼のもとを訪ねると、叫び声が聞こえ、クロロホルムの匂いに満ちた部屋で彼が亡くなっているのが発見される。翌朝電報が届き、妻がクロロホルムを使用する手術中に亡くなったことが判明するが、友人は生前の氏の ‘if she died she would come straight to me first’ (107) という言葉を思い起こし、叫び声は、彼を迎えに来た妻の姿を見たときのものだろうと思う。

死の間際にある者の姿や声を、遠く離れた人物が、見たり聞いたりする。さらに、手紙や新聞、電報などの通信メディアを通し、その幻影や幻聴があった時刻付近に、その人物が亡くなったことが判明する。こうした展開の亡霊物語は、少なくとも、18世紀初頭の Daniel Defoe 作とされる ‘A True Relation of the Apparition of Mrs Veal’ まで遡ることができる。しかし、こうした物語パターンが圧倒的に増えるのは、以下に見ていくように、19世紀末から20世紀初めのことである。

## *Phantasms of the Living*

こうした流行(ささやかなものだが)の背景としては、Edmund Gurney らによる *Phantasms of the Living* (1886) を挙げるができる。英国心霊研究協会 (the Society for Psychical Research) は、亡霊や幽霊などの現象を科学的な方法で精査しようとした団体で、その調査活動の1つとして、亡霊の目撃情報を収集し、関係者への聞き取り、新聞や定期刊行物との照合などを通し、その目撃の信頼度を判断し、真正と呼びうる亡霊体験の記録を収集していた。上述の体験は、‘crisis apparition’ や ‘phantasm of the living’ と呼ばれ、2巻組で1200ページを超える *Phantasms* には、計702の事例が収録された。典型的な事例を紹介すれば、整理番号580の事例では、19世紀のなかほど、アフリカ西海岸の海軍帆船で働く男が、船室で妻の姿を目撃し、その出来事と日時を記録した。やがてその男は体調不良で英国に戻るが、上陸してすぐ、自宅に帰るより先に『タイムズ』紙の既刊分を取り寄せる。すると、例の目撃の時刻ごろ、妻が亡くなったという記述を見つける。この報告を受け取った SPR によって、その死亡記事が確かめられる。

この事例は Perrin の上述の作品とかなりの程度重なっており、19世紀末という時代背景の特徴がいくつか確認できる。まず、イギリス帝国を背景とした、空間的な広がりを活用していること。*Phantasms* はオーストラリア、南アフリカ、インドなどにいる人物の幻影・幻聴を経験した事例を含み (McCorristine 148)、他方、Perrin は英国とインドを舞台とする作品を残し、Arthur Conan Doyle は ‘De Profundis’ (1892) という短編でポルトガルの南西 (モロッコの西) のマディラ島を舞台とした。さらに、そうした遠隔地を結ぶ、通信メディアの安定性。*Phantasms* では、遠方での死の情報が、手紙や新聞といった通信手段によって伝達されることが多く、Perrin では手紙と電報、Doyle でも手紙によって、遠方での出来事が滞りなく伝えられる。

## telepathy と親密な関係

*Phantasms* では、crisis apparition は「テレパシー」を媒介とした現象として整理された (Gauld 162)。テレパシーという語は1882年の造語で、‘distant (tele-) intimacy or touch (pathos)’ すなわち、距離が離れつつも親密であるという、撞着語法的な状況を意味している (Luckhurst 1)。したがって、この亡霊現象は、家族や友人など、すでに存在している親密な関係をベースとすることが多い (McCorristine 135, 150)。たとえば、Algernon Blackwood の ‘Keeping His Promise’ (1906) では、幼少期を共にした男性同士のあいだで幻影現象が起こり、Perrin の ‘Eastern Echo’ (1898) や Henry James の ‘The Friends of the Friends’ (1896) では、どの登場人物のあいだで幻影・幻聴が起こっているかを見れば、どの人物の関係性をもっとも親密なものとして書かれているかが判断でき、婚姻や婚約関係の外側にある関係が最も真正で、最も親密であったというプロット進行の要点をあ

ぶり出すことができる。

### 第1次世界大戦後の「生者の幻」現象

20世紀に入ると、スピリチュアリズムや SPR の活動はかなりの翳りを見せるが、第1次世界大戦を経て、その関心が再燃する (McCorristine 187; Davies 88-89)。文学作品でも、crisis apparition 現象を想起させるものはいくつか見られる。この発表では、その事例として、Virginia Woolf の *Mrs Dalloway* (1925) を取り上げた。本作での亡霊モチーフについては、すでに議論されており (Johnson; 麻生)、なかでも、主人公 Clarissa の発想として語られる ‘a transcendental theory’ はこの文脈でかならず言及されている。この考えでは、‘apparition’ や ‘haunting’ あるいは ‘after death’ といった用語が使用されつつ、他者とのあいだに ‘Odd affinities’ が感じ取れるという信念が表明されている (129-130)。このような考えを持つ Clarissa は、作品の末尾、面識もない退役軍人 Septimus とのテレパシーめいた体験をする。すなわち、彼女が主催のパーティにおいて、ロンドンの別の場所でこの若者が自殺したという知らせを聞いて、彼女は、その身体的感覚を想像、あるいは、共有する。この追体験を、ここまで見てきた crisis apparition の1つとして捉えてみると、2人のあいだには親密ななんらかの関係が成り立つはずである。面識のない人物の「親密性」とは、なかなか想像しにくいものだが、*Phantasms* を振り返ると、家族や友人関係など、既存の親しい関係のほか、‘similarity of immediate mental occupation’ (II 265) によっても、幻影現象は生じ得ると、「親密性」の概念が拡張されていることが分かる。*Mrs Dalloway* の場合、2人はその1日、*Cymbeline* のフレーズを共通で思い浮かべていた。伝達メディアの不在、死の知らせと追体験の前後など、SPR の収集事例とは異なる箇所もあるが、頭を占めるものの共通性という要素から、2人のあいだに、そのような新しいかたちでの「親密性」を見出し得る可能性が指摘できる。このようにして、亡霊のモチーフが世紀末文学からモダニズム作品まで、親密な関係を示すものとして活用されてきた系譜を書くことができる。

### Works Cited

- Blackwood, Algernon. ‘Keeping His Promise.’ *The Empty House and Other Ghost Stories*, Flame Tree, 2022, pp. 91-108.
- Davies, Owen. *A Supernatural War: Magic, Divination, and Faith during the First World War*. Oxford UP, 2018.
- Defoe, Daniel. ‘A True Relation of the Apparition of Mrs Veal.’ *The Penguin Book of the British Short Story*, vol. 1, edited by Philip Hensher, Penguin, 2015, pp. 3-10.
- Doyle, Arthur Conan. ‘De Profundis.’ *Gothic Tales*, edited by Darryl Jones, Oxford UP, 2016, pp. 201-09.
- Gauld, Alan. *The Founders of Psychological Research*. Routledge, 1968.
- Gurney, Edmund, Fredric W. H. Myers, and Frank Podmore. *Phantasms of the Living*. Cambridge UP, 2011.
- James, Henry. ‘The Friends of the Friends.’ *The Turn of the Screw and Other Stories*, edited by T. J. Lustig, Oxford UP, 1992, pp. 79-111.
- Johnson, George M. ‘A Haunted House: Ghostly Presences in Woolf’s Essays and Early Fiction.’ *Virginia Woolf and the Essay*, edited by Beth Carole Rosenberg and Jeane Dubino, Macmillan, 1997, pp. 235-54.
- Luckhurst, Roger. *The Invention of Telepathy*. Oxford UP, 2002.
- McCorristine, Shane. *Spectres of the Self: Thinking about Ghosts and Ghost-Seeing in England, 1750-1920*. Cambridge UP, 2010.
- Perrin, Alice. *East of Suez*. Victorian Secrets, 2011.
- Woolf, Virginia. *Mrs Dalloway*. Oxford UP, 2000.
- 麻生えりか 『『ダロウェイ夫人』におけるオカルト現象——不安の時代を生きる人間と超自然』 窪田憲子 編著 『ダロウェイ夫人』 ミネルヴァ書房、2006年、pp. 67-89.

# 亡霊が亡霊に出会うこと

ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第15挿話「キルケ」再訪

小林広直

1975年に *James Joyce Quarterly* に掲載された Shari Benstock の“*Ulysses as Ghoststory*”は、その表題が端的に示すように『ユリシーズ』を「亡霊譚」として読む批評史上の系譜において決定的な役割を果たした。彼女は第9挿話で語られるスティーヴン・デダラスのシェイクスピア論それ自体の中に、ジョイス自身の創作方法——「影」を描くことで全体の「本質」を暗示させる「ノーモンの手法(gnomonic method)」——が埋められていると指摘する。ここから本発表は発展的に2つの論点を見出し(①Benstockは創作に注力しているが、書かれている一部から書かれていない全体を読もうとする読者にとってもこのノーモンの比喩は妥当すること②『ユリシーズ』においてはむしろ書かれていない部分の方が圧倒的に多いことこそが重要)、第15挿話「キルケ」のラストシーンで、気絶したスティーヴンを介抱するブルームの元に、11年前に生後11日で亡くなった彼の息子ルーディが11歳の成長した姿の亡霊となって現れること、その象徴的父子関係の顕現の意義を再考した。

第8挿話で先王ハムレットの亡霊の言葉を思い出すブルームだが、彼が亡霊的な存在(本シンポジウムが着目した広義における ghostly)であることの伏線は既に敷かれていた。それは、新聞社を舞台とする第7挿話において、給料の支払いが間もなく行われることを示す隠語、“The ghost walks”という言葉がオフィスで発せられる直前に、他ならぬブルームが入室する、“Enter the Ghost”的な演出である。もう一つの彼の亡霊性は、父がユダヤ人であるために、自身はアイルランド人としての national identity を持ちながらも、ユダヤ人として差別されることにある。Ghost Studies の1つの理論的支柱となったジャック・デリダは、『マルクスの亡霊たち』の中で、不気味なものや dasein の議論を経由しつつ、家であり故国でもある home の中にマルクスが未だに十分に歓待されていない状況を「移民」に擬えている。これはまさしく host の多義性——主人と客と敵という相反する特性を持つこと——に通じており、国民の一人として歓待されることなく、外国人という他者として差別的扱いを受けてしまう、その社会的疎外の中にブルームの亡霊性を見出すことは難しくない。

ところで、『ユリシーズ』冒頭からハムレット王子、(息子)の役割を演ずるスティーヴンは、カトリック信仰の喪失を、一年前に死んだ母(の亡霊)から糾弾されるという悪夢を何度も見ており、それ故、彼は歴史を「目覚めようとしている悪夢」と考えている。一方、(父)のブルームもルーディの死の原因は自分にあると考えており、両主人公が愛する死んだ家族への罪悪感に取り憑かれていることがわかる。ここで興味深いのは、第15挿話でブルームは自殺した父、ルドルフの亡霊から「父の家を離れ、父たちの神を捨てた」と非難されるが、実際にユダヤ教を捨てプロテスタントに改宗したのは、ルドルフの方であり(ブルームはその後モリーとの結婚に際してカトリックに改宗する)、精神分析的な投射が起こっているということだ。つまり家族の死への罪悪感、宗教をめぐる罪悪感にも重ねられており、「キルケ」のラストでルーディがヘブライ語の本を読みながらブルームに対し微笑むのは、ルドルフから引き継がれた罪悪感に対する(赦し)であるようにも思える。このルーディの亡霊には、ユダヤ性に加えて、様々な象徴性が付与されているが、本発表は「イートン校風のスーツを着て」という部分に着目した。“Eaton suit”は第6挿話でブルームがもし息子が今生きていたらと想像する場面にも出て来るが、『ユリシーズ』の前作、『若き日の芸術家の肖像』(1916)で他ならぬ幼いスティーヴンがこれを着ていたのだ。つまり、イートン校風のジャケットを着るようになった息子の成長ぶりを喜ぶ父というモチーフが、ブルームとスティーヴン、そしておそらくはジョイスを繋いでいる。

ここで想起すべきは、歴史という主題においてしばしば『ユリシーズ』で論じられるアリストテレスの可能態と現実態の議論だ。古代ギリシャの英雄が現代アイルランドの一市民として生まれ変わるという輪廻転生のモチーフは、現実と幻想が混ざり合う「キルケ」においては、「もしかしたら〜だったかもしれない」というありえなはずの別の人生、言うなれば平行世界的な「別世界(other world)」という主題にも接続可能なのだろう。前掲書でデリダは、to be の存在論に対置されるものとして、to be or not to be の思惟、「憑在論」を提起する。AでもありえなしBでもありえなしというこの憑在の論理は、芸術家を志すものの未だ亡き母への罪悪感に苦しむ若きスティーヴンの可能態的あり方に通じる。亡霊的な他者性を帯びた「移民」であるユダヤ系アイルランド人のブルームだからこそ、(息子)の可能態的な未来に想いを馳せることができるのだ。このことは彼が初登場する第4挿話における、最初の台詞の中に既に描かれていたとも解釈できる。ミルクをねだる猫に対して“O there you are”と声を掛けるブルームだが、ここで『ハムレット』の最初の台詞が“Who's there?”であることを想起したとき、「そこにいるのは誰か？」から「君はそこにいたのか」への転換が見られると言ってい

い。Benstock がノーモンの比喻における亡霊性にジョイスの創作の秘儀を発見したように、あまりにも多くのことが書かれていない『ユリシーズ』という作品において、「君はそこにいたのか」という台詞は、存在するようで存在しない、見えそうで見えない、意味の亡霊を探る読者の姿を自己言及的に暗示しているのだろう。